

中野重

中 野 重 治

新潮社版



日本文学全集 23

中 野 重 治

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年10月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／光邦印刷株式会社 製本所／大進堂製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

汽車の罐焚き

五

歌のわかれ

六

五勺の酒

一四九

萩のもんかきや

一七七

梨の花

一八七

注解

五三

年譜

五四

解説

五五

山本健吉

中野重治

汽車の罐焚き^{かまた}

一

ある日見知らぬ人が私を訪ねてきた。それが鈴木君だった。鈴木君は仕事のかえりらしく、弁当のようなものを抱えて玄関に立っていた。

私は暇があつたのでとにかく上がってもらふことにした。

「じゃ、ちょっと。」

鈴木君はそういってレインコートを脱いで上がってきた。下にはやはり霜降りの仕事着を着ていた。

彼は青年だった。大きな厚い手、平べったい爪、爪の生えぎわの黒味などから一見労働者ということがよくわかった。顔は目がひっ込んでかなり美しかった。

挨拶がわりにした話によると、彼は私と同じ福井県

人でおふくろが福井市にいる。そのおふくろが最近病氣になったので見舞いに行かねばならない。それについて、私の家の近所に鈴木君の知合いの家があり、そこへ来たついでに私のところへ寄つたということだった。

福井市といえば私は十年以上も知らない。そこで私は中学校をやつたのだった。私はなつかしかった。鈴木君の言葉にも十分信用が置けた。

「実は井上君のことですが……」

ひと通り話がすんでから鈴木君はそう言い出した。

「井上君御存知ですね？」

「知っています。」と私は答えた。

しかし私は井上君を深くは知らなかった。最近に会つたのでさえ三年前になつていた。三年前、私が刑務所から出てきて四谷大木戸の木賃宿風なアパートにいた時、ある日突然井上君が福井から出てきたことがあったが——その前に一度東京で会つたことがあり、その後井上君は福井市で働いているはずだった。——いろいろ話したあとで私たちはこんなに話しあつたのだ。

「だから、誰かに君を紹介するということはできんですよ。」

誰かに紹介してくれという風な話だったので私はそう答えた。

「それはわかりました。」と井上君はいった、「しかしどんなもんでしょね？」

「それア、わるい人たちだとは思いませんがね。しかし書いてあることは単純すぎますよ。あれくらいなことなら、何も機関紙に書かなくたっていいでしょう。誰でも知ってることなんだから。みんなの求めているのは、具体的にどうするかってことなんでしょう。僕としていえば、かりに君があゝの派に連絡をつけにきたのなら、かりにだけれども、無理しない方がいいと思うんですよ。ほら、何とかいうのがありましたね、野から山から叩き出せなんていわれた……グループを別につくって、問題を二つのグループ間の争いみたいにするのがやっぱりいかなのじゃないんですか？」

私の考えはこうだった——情勢がどう変っているにしろ、別組織をつくるのは組織論上のまちがいだ。問題はめいめいの仕事場で何を具体的にするかだ。それ

ならば井上君がよく知っていることだ。あの派の新聞だってそれ以上は知っていない。井上君のような人は、知ってることを気長に実行するのがいちばんいいんじゃないか？

井上君という人は人好きのする青年だった。牛乳配達をしていた私のある友達が、「人好きのしないものにはどうしても仕事がむずかしい。あまり鋭いような顔のものには得意が取れない。賢そうな顔をしていてさえ駄目だ。」といって笑ったことがあったが、その点井上君は全く無難だった。井上君は色白で小ぶとりだった。目が細くて血色がよく、平凡な意味で始終にこにこしていた。こういう青年が、大したこともないところへ連絡しただけでそれきりになるのはまちがいだと私は思ったのだった。

井上君の言葉では、彼はやみくもに中央部へ結びつきたいのらしかった。田舎で働いているものの気持ちとしてそれは私にも呑みこめた。しかし私は危ぶんだ。井上君が私を先輩扱いするだけに私は気づいたことはいわねばならなかった。しかし転向して出てきたばかりの私としては、それをいうにしても何にしても

後ろめたかった。

「これは、僕のような人間がそう思うという意味でいつてるんですが……」と私は弁解した。

「それはわかりました。」といって井上君は帰って行った。

その後井上君がどうしたかは私は知らなかった。

ところが、それから八カ月ほどしてある日私は無署名の手紙を受けとった。それには手紙も何ものはいって、ただ井上君の逮捕を大袈裟に書きたてたある地方新聞の切抜きだけはいっていた。そしてそれきりまた井上君の消息は不明になった。井上君を知っているといつても、後先き合わせてこれだけが私の全部だった。その井上君がいま突然鈴木君の話に出てきたのだった。

「それが今度刑がきまりましたね。六月下獄するんだそうです。」と鈴木君はいった、「それで僕が行くのを幸い、簡単に送別会でもやろうってことになったんですが、井上君から手紙が来て、ついでにあなたによろしくいってくれといつてきたもんですから……」

「は、それやどうも……」

私は心から恐縮した。また嬉しかった。

「それでいくらになつたんです？」と私は訊いた。

「二年だそうですがね……」

「おもにどんなことをやつたんです？」

「いや、私も知らないんです。送別会をやるといっても、私と井上とではちよつとしか知らないんですから。」

私は私と井上君との関係を簡単に話した。そして訊いた。

「あなたは福井で知つたんですか？」

「そうです。でも、ほんのちよつとです。一ぺん顔を合わしたつきりいなくなつたんですから。いや、私がいなくなつたんです。」

「首切られたんですか？」と私は訊いた。

「いや、転勤させられたんです。」

「いったい何してたんですか？」と私は訊いた、「どこ？」

「機関庫です。汽車の罐焚きですね。」

「ほう……」

私は目のひっこんだ美しい顔を改めて見る気持ちだ

った。

「あすとは知っているんですよ。」と私はいった、「中学時代、汽車通学してたんですから。五年間乗り降りしたんですよ。」

「ええ。」といったが鈴木君は渋った、「僕のは駅じゃないんですが……停車場ってのは駅でしょう？ 機関庫は駅じゃないんです。」

「つまり駅と機関庫とじゃ別なんですネ？」

「そうなんです。」

「あんた梅酒のみますか？」

私は何だかおもしろくなってきて、手製の梅酒を私も一ぱい飲み、鈴木君にも御馳走したくなった。

「梅酒って……あの黄色いやつですね？」

私はうなずいて、鈴木君が飲むといったので柵から下ろしてきた。

「それで井上君は元気ですか？ もとから丈夫らしかったけれど……」

「ええ、元気だそうです。」

「君のおっかさんはどうしたんです？」

「大したこともないらしいんです。よそへ預けてある

もんですから。」

「お一人なんですネ？」

「ええ。」

私としてそれ以上は訊けなかった。するとそれだけに機関庫の話にそそのかされてきた。

「しかし、そうするとあれですね……」と私は喋った、「世間じゃ停車場ってことしか考えていませんね。あの枕木の柵やなんかのある……」

「そうなんですよ。」と鈴木君もつづけた、「無知ってわけでもないでしょうがね。停車場、停車場です。宿屋があつて広場があるでしょう。電車だの自動車だのの発着所にもなっているし、それから自動電話、交番なんてのがありますね。駅にゃア違いなないが……」

「いったい、汽車アどうして出るんです？ 切符なんか買つて……順序ですね……」

私はへんにそれが知りたくなった。

「それやア、いろいろありますよ。」

鈴木君はちよつと私を見た。

「駅のほうからいうと、まず切符をかうでしょう？」

警手が、『下ノ関ゆうき、一二三等急行オ』ってなこと

を言いますね。このごろは拡声器をつかいますが。それから改札です。小荷物係が手小荷物を積みます。六分停車ぐらいなところならもうお客は乗りこんでいますね。それからそろそろ発車時刻になりますね。助役がはりきって出てきて、いろいろあるけれどもまず機関車と客車の連結を見るんです。それから関係転轍器が正当方向に開いてるかどうか？……助役の位置は列車のまんなかです。そこでいよいよ出発信号が下りますね。信号所から発車ベルが鳴ってきます。助役は時計を引き出して睨めっこです。そして前やら後ろやらを見て、後ろむきのまま右腕を（といって鈴木君は右腕を横へつき出した。）水平につき出します。『行ケ列車』——後部車掌への出発合図です。後部車掌は待ちかまえていて、助役がやったと見たら反対に（鈴木君は左腕をつき出した。）左腕を水平につき出します。そして手笛をうんと長く吹きます。機関車への合図です。機関手の右手がホイッスルのハンドルにかかつて」といって鈴木君はちよつと笑った、「汽笛一声ですね……」

「するとあれですか？ 機関手がいちばん大事だってことになりますか？」

「いいえ！」鈴木君はきっぱり否定した、「しかし無論、機関手が動かなければ列車は動きませんよ。切符なら誰だって売れるようなものですが、機関車となったら機関手でなければ……それやア機関助手でも駄目なんです。機関助手ってのはつまり火夫ですね。罐焚き……」

「罐焚きは駄目ですか？」

「駄目です。規定上駄目です。だから途中で機関手が仆れたら列車は運転中止です。停まらなくっちゃいけません。実地にやそうもいきませんがね。だからいくらベルが鳴ったって、いくら後部車掌が手をあげて笛を吹いたって、機関手がリバーシングリバーを進行方向へ送って、バイパスの弁を足で蹴とばさないことにや列車は一センチだって動きやしません。」

「ふうん……」

何を蹴とばすのかわからなかったが私は感心した。

鈴木君が話のうまいのにも感心した。

「あんたなかなか話が上手ですね。」

「ええ。みんなそう言います。」と彼はすぐ認めた。

「ひとつ書いたらどうです？」

「いやア、駄目です。駄目なんです。」

彼は、大きな手をぴたっと音をたてて後頭部へあてて反りかえった。

「だって喋るとおり書けばいいでしょう？」

「いやア。」彼はまた頭をおさえた、「駄目なんです。それができないんです。みんなそういうんですけどね。からきし駄目なんです。」

「だって大事なことでしょう？ 世間じゃ何も知らない。切符売りや改札のことなんか知らない。」私も酔ってきていっそうおしゃべりになった、「いい氣になつて窓で挨拶なんかしてるでしょう。それでも何でも、機関手が動かないことには汽車そのものが駄目だつていうんだから。大事なこっちゃありませんか？」

「大事ですよ。だから書きたかつたんです。そういうこともあつたんです。でも、駄目ですね。手紙なんか何でもないんだがなア……」

自分でも不思議だという風に考えていたが、今度は向うが私に書けとすすめてきた。

「しかしあなた書きなさい。知っていること何でも言いますよ。話すのはうまいんだから……」

私は、目がずうっと開いてくるような氣がしたが自信はなかった。自信はこの頃ますます失われていた。それは上手下手ということではなかった。上手な作家には私は恐れなかった。しかし立派な作家にはこわかつた。立派な作家たちのその立派さ、深さ——その腹立ち、愛憎、人に対しては無論、その自分に対する嚴格、そういう、作家の根本的なところで自分に全く自信が持てないでいた。それだけに、鈴木君の話しそんな話はなおさらこわかつた。

しかしまた書きたかつた。

「やるか？ 腕だめしに……」

私は眩めまいするような氣持ちで動揺した。

「しかし、やはり、書くか？ いったい……」と私は動揺した。

「ひとつ書くかな？」と私はいった。

「書きなさいよ。」

鈴木君はますます私にすすめた。

「それやアいろいろあるんですから。世間じゃ知らないですよ。それで機関車がピラを撒いたことさえあるんですからね。いや、そとの人に、機関庫が出し

たんです。例えばですね、世間じゃア機関手と機関助手、火夫ですね、その区別さえ知らないんです。それはいいですよ。しかし事故があるでしょう。そうすると尻を持ちこんでくるんです。その来方が困るんですよ。火夫は石炭をくべてるんですからね。十秒に一回くらいのわりで投炭してるんです。ほかのことはできもせずわかりもしないんです。暇がないんだから。それから機関手にしてもです。これや、今はそう言いません。今は機関士です。火夫は機関助手。で、機関手は運転をやるんですが、世間じゃア、機関手には列車の前方が見とおしだと思ってるんですよ。しかし駄目ですよ。機関車の胴っ腹が寝てるんですから。それも（といって鈴木君は手真似をした。）こう前へ縦に寝てるでしょう？ 機関車が大きくなればなるほど胴っ腹もでつかくなる。その後ろへ腰かけてるんですから、覗いたって、邪魔になつて見えやしません。機関手は左つかわに腰かけてるんですが、だから、線路を右から左へわたる人があるとするでしょう……完全に見えませんね。左側だって同じです。コースが右へ曲がってるときなんか、それやア危ないんですから。

右、右と行くんだから、信号標が、一つずつ、ひよいひよいと見えてくるんです。見張りつきりに見張つてたつてそうなんですからね。それを、仕事をやってるんですから。世間じゃそれを知らないから、そういうわけのもんじゃないんだからつてことを書いて撒いたんです。ほんの一例ですよ。」

「そうだなア……書きたいなア……」

「書きなさいよ。まだまだありますよ。ほら、鉄道は特別会計でしょう。砲兵工廠、燃料廠なみですね。そこで運賃の問題です。日本のお客なんてのは、それやぼられてるんですから。それから国有でしょう。官吏ですからね。」

不意に私は松井信三のことを思いだした。

「あなた、福井にいたナいつ頃のことです？」

「三十〇年から〇年です。」

「ふうん……知らないかな？」

しかし私はどう切り出しているかわからなかった。

「……？」

「いえね、僕の、知ってる人ってわけでもないけれど、たしか火夫をしてた人があるんですがね……」

「誰です？」

「松井ってんですが……」

「松井？ 松井信三ですか？」

「そうですよ。」

私はおどろいた。

「信三ですよ。知ってますか？」

「知ってるどころですか！ 私の転勤にや松井が関係があるんですよ。松井のおかげでっていうんじゃないやありません。私のおふくろは松井のとこへ預けてあるんです。」

ますます私はおどろいた。松井たちは私の部落出のものだった。私は信三の方は殆ど知らなかったが、信三の父の由太郎さんの方はよく知っていた。由太郎さんは百姓をやって型どおりに失敗すると、それを取りかえすつもりで醤油の取次ぎを始めたのがまた失敗した。結局村を逃げだして一家福井市へ出て行ったのだったが、そのとき村の方々の家へいろんな不義理を残して行った。松井は私たちの遠縁にもあたっていたが、残して行った不義理のため、村に残っている親類どもの立場がわるいと考えて、その後いっさい村へ寄

りつこうとしなかった。

「何じゃい？ 大手を振って祭りに来れやアいいんじや。」

やせ我慢屋の私の祖父が祭りごとにいうのを私は子供で聞いたことがあった。

「そうですか……あなたの親類なんですか……」

鈴木君もおどろいたらしかったが私は訊いた。

「それで信三君、その後どうしてます？ たしか火夫になって安心だなんていつてたようでしたが……」

「死にましたよ。」

「死んだ？」

「肺病で死んだんです。まだ火夫じゃなかったんです。火夫見習でした。」

二

その夜私たちはいつまでも話していられなかった。私はともかく、鈴木君には明日があった。

鈴木君は今は罐焚きではなかった。福井から名古屋の機関庫へやられ、そこで首切られて東京へ出てき、今は工場にはいつて働いていた。

名古屋での活動については、鈴木君はごく簡単にこんな風に話した。

「そうです。だから私はその組織には無関係だったんです。だから一部からは非難されましたよ、経済主義的だといって。しかし売れましたね。いちばん売れた時で七十部売れました。会員は二銭、これは会費です。会員外は四銭で売ったんです。無論つぶされましたよ……しかし今でもまちがっていたとは思いません。」

鈴木君自身は名古屋時代を重要視しているらしかった。そのころは運動が上ぼり坂で、東京で「機関庫」という芝居があった時には、静岡や長野の機関庫から二十人三十人と見物にきたそうだった。

「しかしピエル・アンプという人の『軌道』という小説は読んでもわからないとがありますね。」なども鈴木君はいった。

今の鈴木君の工場はレジスターをつくっていた。ナショナルとかいうアメリカ物の国産品化だったが、この頃では何でもつくり、戦争のあおりで毎日忙しいということだった。

結局、書く書かぬにかかわらず私は話を聞くことに

なった。

「じゃア、福井から帰ったらすぐ手紙を書きますからね。そしたら来て下さい。私が来てもいいです……ああ、酔った。」といって鈴木君は立ちあがった。

「そいじゃア。井上君によりしくいって下さい。それから信三君の家へも……」

しかし鈴木君は文鎮を見つけたらしかった。

「あ、タガネですね？」といって彼はそれを取り上げた。

それは私が、近所の通りで、座むしろを敷いてやっている古道具屋で買ったものだった。ちょうど文鎮にするのに向いた古タガネだった。

「文鎮にしているんです。」と私はいった。

「あ、文鎮……私あげましょう。きれいなのを上げます。」

きれいなタガネをくれようというのか、文鎮そのものをくれようというのか私にはわからなかった。しかし私は気持ちが悪かった。

私は汽車の罐焚きが現われようとはかつて考えたことがなかった。今それが現われた。井上君との関係

で。松井との関係においてさえ。

私は、人々が私を取りまいていてくれるのを感じた。ある人は下獄するのに私を思い出してくれた。私を取りまいて……私を中心にはない。しかし私も人にまじってそれらの人を取りまきたい。相手が女であつても、私はびたりと肌をあてるだろう……

しかしその翌々日になつて鈴木君から手紙が来た。

「先夜はお邪魔しました。福井へは行かずにすみました。おふくろの病気はもういいのだそうです。行けば金ですからね。昔なら口ハですが、今はそういきません。

井上君は元気だそうです。松井も——信三の弟です。なかなか元気だそうです。いま工業へ行っています。高等工業ではありません。弟は兄と違って頑健だそうです。松井の母も元気だそうです。松井の家は素人下宿をやっているのですが、私の母は共同経営者といつたようなものなのです。

あと数日夜業はありません。この手紙が着いた日お出でになりませんか？ その翌日、翌々日でもかまいません。その後はまだわかりません。資料も少しは残

っています。」

そして「この間約何町」という風に書入れをした、詳しいきれいな地図が同封してあつた。

着いた日は駄目だったので私は翌日出かけて行つた。ひどい雨の日だった。バスを降りて歩いて行くとすぐ裾が気持ちわるく脛にへばりついてきた。そこは、八百屋、安カッフェー、風呂屋、下駄屋などの並んだ街だった。その様子は、新設区中いちばん人口の稠密な区といわれているのにふさわしかった。

地図どおりに三つ曲がつて私は暗い路地へはいつた。向うにぼうつと黒く見えるのは荒川の土堤らしかった。そこからまた左へ曲がつた。二軒長屋が見え、その一方の明るい方だろうと思つて近づくとそれがやはりその家だった。

「はア、いらっしゃい。」

鈴木君はすぐそらいつて出てきた。私は、玄関の自転車のわきへ濡れた足袋を脱いで上へ上がった。鈴木君は細君持ちにちがいがいなかったが細君は見えなかった。

「じゃな、あした来いよ。とにかく履歴書持ってきて